ある女性アイドル歌手の自殺を契機に抑うつ状態を呈した１１歳の女児の１例
－前思春期の情緒発達に焦点を当てて－

小林隆児・牛島定信

抄録：第二次性徴の開始と初潮発来直前に収集癖が出現し、憧れのアイドル歌手の自殺を契機に抑うつ状態を呈した１１歳の女児の症例を報告した。本症例は短期間の支持的精神療法で治癒したが、抑うつからの回復過程で認められた前思春期の情緒発達段階の過程を見ると、母親に対する依存欲求の高まりから大人社会への特有な好奇心の出現、次いで母親へのアンビバレントな状態から憧れのアイドルの対象が同性から異性へと変化し、さらに自己愛の高まりとしての父親の理想化が起こっていた。そして、こうした発達段階を経て初めて同性の仲間への接近が可能になっていた。
Key words: depression, pre-adolescence, perimenarche syndrome

はじめに

現代の子供の身体の早熟化現象による思春期の学童期へのずれ込みや思春期後期の遷延化 2)は、現在の精神科における思春期患者の臨床場面で様々な波紋を投げかけている。中でもとりわけ昨今の思春期問題の多くが子供自身の母子分離と自立の発達過程の困難さにあることは疑いのないところである。

筆者らはこうした身体面の急速な早熟化現象が現在の思春期患者の臨床にどのように反映しているかに着目し、まだ幼児的対象関係が残っている前思春期に初潮などの第二次性徴が起こると母子関係に様々な波紋を巻き起こし、それをもとにして心身にわたる様々な症状を呈することを指摘し、初潮周辺症候群（perimenarche syndrome)と呼び前思春期の情緒発達の問題を論じてきた 5,10)。

本症例は第二次性徴の開始と初潮発来直前に収集癖が出現し、憧れのアイドル歌手の自殺を契機に抑うつ状態を呈した１１歳の女児である。短期間の支持的精神療法で治療は終結したが、その回復過程の検討を通して収集癖と抑うつがいかなる意味を持ち、第二次性徴に伴う身体像の変化と心身の動揺からどのように立ち直っていったかを前思春期の情緒発達の視点から論じてみたい。

症例提示

症例：**Ｋ子**　小学６年の女児
１１歳８か月初診
主訴：寝る前に身の回りの物を自分の布団の周囲に置かないと気が済まない。自殺念慮。
家族構成：父は現在３９歳で警察官。ほとんど少年課に配属され非行少年や家出少女などの対応にあたってきた。母は３４歳で看護婦。患児が小学校に入学してから再就職している。父母共に６人同胞の末っ子。

姉１３歳（中学２年)、弟９歳（小学４年）の２人同胞がいる５人家族。姉、弟は快活だが、患児はその狭間で何かと自己主張することが少なかった。しかし、現在は身長１５５ｃｍ、体重４１・。活発で成績も良く、学校ではバスケットボール部のキャプテンをやっている。家系内には精神疾患の発現は無い。
生育歴：周産期は異常無かったが、乳児期、母乳は出ず、人工栄養。吐くことが多かった。体重が余り増えずやせていた。もじもじした子で、母から離れきれず、母の顔色をいつもうかがって行動する子だった。人見知りが強く、なかなか人に溶け込みにくかった。しかし、母の言うことはよく聞き、手のかからない子だった。３歳の時には一人で買い物をするまでになった。几帳面で洗濯や台所掃除をさせると患児が一番綺麗にする。神経質で布団がちょっとでも臭いがすると気になって消毒したり洗濯をするほどだった。思ったこと

をストレートに言えず、身体がきつくても我慢することが多かった。保育園時代、鼓笛隊の練習があった頃、練習の厳しい先生から叩かれて緊張の余り首が回らなくなったり、夜驚や夜中に起き上がって鼓笛隊の行進の真似をして動き回るといった夢中遊行が一時みられるというエピソードがあった。

現病歴：小学５年２学期頃から特に愛着が強まっていた人形を１０個ほど寝床の布団の周囲に置いて寝ないと安心できないようになった。自分の大切な物が寝ている間にどうなるか心配でこうした行動をとるようになったというが、特にこれといったきっかけがあった訳ではないらしい。人形ばかりの頃はまだ母も許していたが、次第にエスカレートしていった。勉強道具、筆箱、ちり紙、カセットレコーダーなど、自分の使う持ち物を何から何まで次々に布団の周囲に置いて寝るようになった。寝ている間にその物がどこか違ったところに移動してしまうのではないかと心配でたまらない。靴だけは玄関の側の部屋に父母が寝ているので安心して自分から取ってこない。自室のごみ箱がちょっとずれたり、本棚のシリーズ集が一冊でもずれていると気になるようにもなった。こうした収集癖が同年１２月頃ピークになり、母が人形だけなら良いが、他の物は駄目と禁止するとかえって他の物まで気になっていった。時には自分の持ち物以外にも弟や姉の物までも無断で持ち出すほどにエスカレートしていった。

母の話では５年生になってから反抗期にもさしかかり少し生意気な態度を取るようになってきたことも手伝って、男性の担任に対して感情的な反発を示すようになり、家に帰って盛んに担任の悪口を言うようになっていたという。

６年生になるとそれまで弟、姉の３人一緒に布団を並べて寝ていたのを嫌がり一人で寝たがるようになった。さらに６年生になった直後の４月８日、アイドル歌手岡田有紀子が飛び降り自殺をしたという事件が起こった。患児はことのほか彼女に憧れ、プロマイド写真をいつも大切に枕元に置いて寝るほどであった。この事件は患児にも大きな衝撃を与え、事件以来１週間は泣き続け悲しみに明け暮れた。他の女友達に彼女のファンはおらず、ほとんど男の子であったため、一人で考え込み悲しんでいた。その後も事件を思い出すたびに悲しみが毎日のように襲ってきた。外では努めて明るく振る舞っていたが、ひとりになったり、授業中一人で考え事をすると悲しみが増すのだった。本屋で週刊誌を立ち読みして自殺関連記事があると、それをむさぼり読むことが続いた。最近では周囲の人ばかり幸せそうに見えて悲しくなり食欲も低下。寝つきや寝起きも悪くなり、物音ですぐに眼を覚ましてしまうほどになった。

事件の２か月後の６月２０日、死にたい、死にたいと盛んに訴え、母のカミソリを取って自分の手の指を切ろうとした。その時は痛みですぐに止め、母に救いを求めた。以来自殺願望を洩らすようになった。そのため母も心配になり、６月２４日母の同伴で当科を受診した。

初診所見：母子同席の時はほとんど語らなかったが、一人になると岡田有希子事件以来の悲しみをうつむきながらもよどみなく話した。抑うつ気分、もの悲しさ、不幸感のほかに自殺念慮もあり、他に睡眠障害（就眠困難、熟睡障害)、食欲低下が認められた。収集癖は就寝前になると強まるが、日常の活動に影響を及ぼすほどの病理性はない。なお初潮は未だだが、乳房の膨らみその他の第二次性徴を認めた。

治療経過：個人精神療法と母親面接を行うと同時に amitryptiline 20mg/day 投与開始。眠気が強いが、睡眠はよくとれるようになった。父が当直で留守の時は就寝前の不安が高まり、収集癖は一時的に増強するが、全般的には症状は比較的順調に軽快していき、自殺念慮も軽くなった。面接では本屋で週刊誌を立ち読みしたこと、岡田有希子のどんなところが好きかといった話しをする一方では、現在の学級担任のことを「前に言ったことと今度言ったことがコロコロ変わるし、八つ当たりするし、怒ってばかりいる」と激しい口調でののしり、自ら妥協や曖昧なことを許せない気持ちが強まっていることがうかがわれた。また家庭では母にすぐ甘える弟に対して嫉妬が強まっていた（第１回、７月１日)。

母の報告では布団の周りに置く物が自分のものから姉の持ち物（体操服、本、習字道具

など）に変わってきた。自分の領域を犯されることに敏感になってきていることがうかがわれた。しかし、置く物の数自体は減ってきていた。さらに患児は学校では行動的で、男子生徒から「暴力団のボス」と言われているほどであること、家ではおとなしいが、立腹したときは激しいというように以前とは随分変わった一面が語られた（第２回、７月８日）。患児自身も布団の周りに置く物が自分の物から姉の物へと変わってきたことを述べたが、何となく心配になってという漠然とした気持ちからというのみであった（第３回、７月１５日）。

６年生の夏休み、キャンプ、水泳、バスケットボールなど様々な活動に積極的に参加し元気に過ごした。布団の回りに置く物は増えたり減ったりしていたが、ついに弟の持ち物を持ち出すほどになった。しかし、岡田有希子の話をしてもさほど動揺もなくなり、悲しみは起こらなくなった（第４回、８月１９日）。この日の２週間後（９月３日）初潮を迎えていた（１１歳１０か月）。

２学期開始以来、しばらく受診しなかったが、４か月後母から相談があり、最近再び収集癖がひどくなってきたという。姉、弟の持ち物を本人の許可を得ずにどんどん自分から取り出して自分の部屋に置いてしまう。自分の周囲は本だらけ。ピアノ、エレクトーン、机などを周囲にかため、その下に本を積み上げ、自分を取り囲むようにしている。姉、弟らは自分の持ち物が行方不明になってしまうため、家族も次第に患児に非難めいた態度をとるようになってきた。家族内の緊張がひどく高まってきた（第５回、１２月９日）。そしてついに父の持ち物まで気になりだした。黙って自分の鞄の中に父の本を入れて布団のそばに置いて寝る。鞄の中に入れて置かないと安心できない。破れていたり折れ曲がっていると嫌。布団の中に入ると多少は安心するが、夜になると心配になり、仲々寝つかれない。カーテンの位置まで気になる。朝起きも悪い。自殺念慮が再び起こっていた（第６回、１２月１６日）。この回初めて両親そろって面接を行った。父が語る患児の姿は、勝ち気で担任にも強情を張り、自分を素直に出せず、言いたいことを心の中に溜め込みやすい。親の感情を敏感に見抜き、被害意識が強く、ひがみっぽいという。将来は看護婦になりたいといい、姉は婦人警官になりたいといっている。父はさほどの不安も無く、見守っているといった態度であった（第７回、１２月２４日）。母の勧めもあってこの後から同胞３人一緒に寝るようになった。部屋が変わってから姉や父の持ち物を気にしなくなった。自分の鞄や勉強道具程度置くだけで我慢できるようになった。ウサギのペットを抱いて寝ている。以前は一人で寝たくなった時期もあったが、今は３人で寝ている方が気が安まる。友達と話す時、他の人はあの男の子が素敵だとか身近な人の名前をあげるが自分はまだアイドルに憧れている。今でも夜寝る前に岡田有希子が死んだショックの体験を思い出して悲しくなってしまうと述べ、その後彼女が死んだ日のことを回想して次のように述べた。「その日は午前中で学校が終わり、帰りに本屋で岡田有希子の本をみていた。帰ってラーメンを作っていたら姉がテレビをみていて大声を上げて岡田有希子が自殺したといっていた。信じられなかった。・・・」こうして面接の中で事件以来の体験をレビューしながら、主治医はその際の感情を支持していった。また担任の曖昧な姿への批判を強く述べるのを、曖昧なことが許せない気持ちだねと明確化しながら支持的に接していった。このような面接を通して、再び症状は軽快していった。母も主治医に保証を求めながら動揺せず見守れるようになっていった（第８回、１９８７年1月６日）。

自分の性格面の変化の兆しを次のように説明した。元々少しおませだったが、小学５年頃から感受性が高まり、担任にまで「はっきり言って下さい」などと食ってかかるほどで、自分でも言ってしまってから後悔するらしい。こうした性格は嫌で生意気だなと思うけども、はっきり物を言うことは自分でも好きで、はっきりしない人は大嫌いと述べ、こうした変化がこの頃起こり学校でも目立ち、自分の名前をつけて「〇〇組」とか「不良」などと男の子に言われて恐れられているほどという。相変わらず週刊誌を読み続け、「岡田有希子の自殺の原因は、峰岸徹が最初やさしくしていたのに、急に冷たくなって他の女の人と結婚すると言い出したから」、「中学２年の時にも１回男の子が好きになって自殺を試みた

ことがある」ということが手記などで分かったことを報告し、大人の世界の男女問題への関心の高まりとアイドルの自殺の背景を曖昧なままでは済ませたくないという患児の気持ちがここにも強く表現されていた。そして母には自分は「大人」だと思うのにそうした自分の気持ちを分かってもらえないと訴えるという。こうした患児の態度に母はかなりの戸惑いを示していた（第９回、１月２０日）。しかし反発は示しながらも症状はほとんど軽快していった。そしてこの頃には同じく男性アイドル歌手である少年隊の一人「カッチャン」にバレンタインデーのチョコレートを送ったことが母から報告され、岡田有希子から次第に脱皮していることが明らかになった。その後しばらく来院しなかったが、薬は不安な時に飲みたくなるということでclomipramine 10mg, bromazepam 1mg投与を続けた（第１０回、２月１７日）。

そして２か月後、中学生になる直前、これからは病院にも容易には来れなくなるからその前に主治医に会いたいと来院。のんびり春休みを過ごしている。私の母はしゃべり方がうるさい、もう少し静かにしてくれればいいなと思う。具体的な言葉そのものより母の存在そのものに敏感になって雰囲気で嫌になるという。例えばテレビを見ていても、「早くせんね」とせかして、母が勝手に自分の荷物を部屋に持っていってしまう。そのため母の言うことを無視して抗議するため母子間の緊張関係は増々エスカレートしてしまうらしい。さらに自分で他に変化した点として以前ならファミコンや菓子を欲しがったのに今はステレオが欲しいという。ステレオで一人音楽を聴きながらいろいろ考えていると実に楽しくなると述べ、自分一人の世界が着実に創造されつつあることがうかがわれた。中学生になったら自分の生活はどうなるか、どうしたいかという近い将来の生活に思いをはせて、それでも不安感は感じなくなったらしい。中学生になったら仲良しの友達を作ったり、バスケットボールで頑張りたいとか、他の人は身近な人に好意をもっているが、自分だけは少年隊のカッチャンが好きで、他の友達と違うけど、中学生になって身近な人が好きになれればいいなと思うなどと、異性への関心が現実味を帯びる直前の世界にいる自分を内省的に語るまでになっていた。

面接の最後に就眠儀式についてどのような感じ方をしているかを尋ねると、何か嫌なことをしているという感じがして懸命に減らそうと努力していること、何故なら子供っぽいことで恥ずかしいから。だから今はぬいぐるみをもって寝ているとのことであった。主治医はこうした行動は恥ずかしいことではなく大切なことであるとして患児の気持ちを支持した。また、母への反発心がある一方では父の存在は自分の行動に大きな影響を及ぼしていることが述べられた。即ち父が警察官なのでやりたいことも抑えるようなところがあるという。さらにこの頃、患児は５年生の時から嫌いな女子と無理して付き合い、６年生になった時盗みをしようと誘われていたこと、しかし自分の父が警察官でもあることを思って勇気を持ってその女の子の誘いを断ることが出来たこと、卒業してやっとこの子と離れることが出来てスカーッとしたことなどを母に告白したという。こうして患児は中学生生活に入り、治療は終結した（第１１回、３月３１日）。

その後２年ほど経過しているが、中学生として特に大きな問題もなく充実した生活を送っていることが母の報告で明らかになった。

考察

１．臨床診断について

まず本症例の臨床診断について検討してみたい。症候学的にみれば主症状は抑うつでアイドル歌手の自殺を契機とした反応性のものであることから反応性の抑うつ状態で、ＩＣＤ－９では３１３．１小児期及び思春期に特有な情緒障害－悲哀と不幸を伴うもの－に該当しよう。自我の発達水準や適応水準は年齢相応に高いことや、精神病症状は認めないことなどがその根拠ともなろう。

しかし自我の発達病理の側面から検討すると、幼児期の睡眠障害や神経質傾向など口愛期の母子分離をめぐって未解決の部分が多々あったことや今回の発病で認めた症状も幼児

期と関連したものも少なくない。従って本症例では潜伏期に一度消失した強迫的色彩の強い幼児神経症が思春期直前に再発したとも理解される。しかしながら、余り手を加えることもなく、初潮の発来とともにこれらの症状が消失し年齢相応の生活に戻れていることは、この病態がライフサイクルの中の第二次性徴を迎える前思春期特有の発達課題をめぐる問題を中心にはらんでいたことを推測させ、実際、治療経過の中でその発達課題を乗り越えることができた時初めて病態も改善しているのである。そうした点から本症例は前思春期の発達障害とみなせる一面を有していたと言えよう。

２．治療経過について

今回この症例をわざわざ取り上げた主な理由はライフサイクル的視点からとらえた前思春期という発達課題について非常に示唆的な治療経過をたどっているからである。即ち、初潮を初めとする第二次性徴を迎えるにあたって今日の少女に及ぼす心身の混乱の様相とその回復過程がどのように進展してゆくかを本症例は教えていると考えたのである。そこで本症例の治療経過を以下の順序で検討してみよう。

１）抑うつ状態前の収集癖の時期

抑うつ状態を呈する以前の患児は活発で成績も良く、学校の部活動でもバスケットボール部のキャプテンをするほどであった。さらには男子生徒から「〇〇番長」と恐れられるほどにお転婆な一面が目立っていたという。さらにこの時期、患児には５年生の担任の優柔不断な態度に批判的な態度が強まっている。即ち患児のもつ禁欲的で強迫的な心性が尖鋭化しているのである。また弟の母親に対する甘えに対して烈しく非難するといった攻撃衝動の高まりをも同時に認められているが、このことは患児に母への依存欲求が高まってきていることをうかがわせる。

Blos,P.(1962)2) は前思春期を、身体の第二次性徴に伴う欲動の増加、潜伏期に保たれていた欲動と自我の平衡の変化、退行と退行に対する防衛の交互出現の三つの特徴をもって定義している。しかし、この時期の欲動の高まりは思春期の性衝動とは異なり未だ性愛化されていない漠然とした性衝動と攻撃衝動の増加に特徴づけられ 6)、こうした内的緊張に対して女子が心の平衡を保とうとしてとる行動は患児に顕著に認められたような「お転婆」8)心性として理解されている。こうした点から患児は潜伏期から前思春期段階へと移りつつあることがうかがえるし、初診時は乳房の発達を初めとする第二次性徴は開始されていたが、初潮は未だという身体面でも微妙な段階であり、前思春期の発達過程にあったことが身体面からも裏付けられている。さらにそれを証明するかのように治療開始後３週間余りで初潮発来を迎えているのである。

ではこうした時期に収集癖という強迫的色彩の強い症状が出現してきたことをどのように理解すればよいであろうか。この収集癖は確かに家庭の中では問題になるほどに強迫的色彩が強かったのであるが、それは就寝前という自我の退行を起こしやすいごく限られた状況でのみ尖鋭化しており、学校生活など他の場面では、せいぜい番長と呼ばれた「お転婆」な態度や担任への攻撃性に示された厳格さといった程度で、内的にも神経症的葛藤は情緒発達を限局的に阻害するにとどまっていた。すなわち、この収集癖という症状は状況特異的であって、生活全般にわたって適応を阻害するような広がりは持っていないのである。

このように考えると本症例の収集癖の中で見られた寝床の周囲に所狭しと置かれていた物は過渡対象としての機能を果たしていたともみなせるのである。牛島（1982)9）によれば、過渡対象は、正常な情緒発達における自立と自我自律性への第一歩を表し、分離が主題になる時にその重要性が際立ってくる。いわば分離不安や抑うつに対する不安の防衛としての機能をもっているという。そのように考えると、この収集癖の背景にどのような不安が存在していたかを考えることが必要になってくる。今回の治療経過の中ではこの点は明確にできないまま治療終結に至っているが、治療経過から推測されるのは収集癖が最初に出現した頃の女友達との交友関係にまつわる不安である。元来禁欲的な患児がこの交友

関係の中で引き起こされた誘惑によってかなりの不安が引き起こされていたことが可能性として指摘されよう。

２）抑うつ状態の出現

以上のような心的状況の時に、患児は憧れていたアイドル歌手の自殺というショッキングな事件が直接の引き金となって抑うつ反応を呈している。この事件は当時マスコミによってセンセーショナルに取り上げられ 1)一種の社会現象を呈したこともあって、その後の青少年の自殺の増加までをも引き起こすに至っている 4)。前思春期は村瀬 (1983)7) が「歌手中毒症」と称しているようにアイドルに熱中しやすい時期であり、患児はそのような若者の一人とみなせるのであるが、抑うつ反応と自殺企図までもたらした要因をどのように考えればよいのであろうか。

勿論憧れの対象であったアイドルの衝撃的な自殺は患児に対象喪失をもたらしたことは紛れもない事実であろうが、それのみで患児のその後の反応を説明するのは余りにも無理がある。この年代の憧れの対象は他者としての憧れの対象の喪失ではなく、こうありたい自分、こうなりたい自己として将来に希望をつなげていた患児が、岡田有希子の自殺によってその拠り所を失い、自己壊滅の恐怖を体験したものと思われる。そのため入眠儀式に一時救いを求めたが、自己壊滅の恐怖はいやされず、希死念慮が出現したのであろう。本人が直接語ったことではないので推測の域を出ないが、牛島(1980)8)のいう「空しさ」の体験を中心とした前思春期心性との関連で更に考察を試みたい。

この時期の少年少女にとって従来の道徳的価値観を中心とした自己イメージは自己の身体の変化に伴い、大きな変化を余儀なくされていくのであるが、その際彼らは状況的には「淋しさ」の、主観的には「空しさ」の体験をしているというのである。本症例で抑うつ反応の前に出現していた収集癖はこうした心理状態をいやす役割を果たしていたと考えられ、そうした心的状況が基盤にあって初めてアイドル歌手の自殺が直接の引き金となって抑うつ状態を呈したと考えるほうが無理がないように思われるのである。

３）抑うつ状態からの回復過程

治療経過をみると抑うつ症状や収集癖が若干の動揺はあったにせよ、初潮発来を迎えてから急速な改善を示している。では抑うつからの回復がいかに行われたかを検討しなくてはならないが、抑うつが対象喪失をめぐる病理であることを考えるとアイドルの自殺によってもたらされた対象喪失から、新たな対象の再発見ないし再創造がどのように起こっているかを明らかにする必要があろう。

まず最初に顕著な現象として起こってきたのは、母親に甘える弟に対してひどく攻撃的になり、嫉妬が強まってきたことであるが、これは患児の母への依存欲求の高まりを示していた。

次に明らかになったのは、岡田有希子の自殺の原因について毎週のように本屋で週刊誌を立ち読み、その中でも彼女の男女問題についてとりわけ関心が強まっていることである。大人の世界や男女の性に対する関心と不安が高まっていることがうかがわれるのである。そして家庭ではいつも子ども扱いをする母親に対して「自分は大人だ」と強く主張するようになっている。前思春期の性衝動の高まりの中で、彼らは従来の道徳的価値観に強く支配されていた自己イメージが混乱し再創造を余儀無くされるが、患児ではこのような大人の世界への特有な好奇心でもって第二次性徴に伴う新しい自己イメージが創造されていったことを示しているように思われる。しかし、この時期は彼らにとっては未だ幼児的対象関係からの脱皮がなされておらず、そのため一方では自分を大人と認めない母親に対してひどく反発し、母親の介入を嫌がるようになるが、他方ぬいぐるみを離せない自分の幼児性に自ら恥じらいを示すようにアンビバレントな心性がいまだ根強く残っている。こうしたアンビバレンスが大きな混乱を引き起こさずに済んだ背景には先に述べた過渡対象の存在があったことは言うまでもない。

さらに抑うつの回復につれ、それまで心の中の大きな存在であったアイドルが岡田有希子から少年隊へとその対象が変化している。即ちアイドルの対象が同性から異性へと移行

している。そしてこの時期最も心安まるのは一人でステレオを聞いている時だと述べるまでになっている。ここで自己の固有の世界の創造がなし遂げられるのである。

こうして初めて現実の同性との仲間関係へと入っていけるようになるのだが、前思春期の発達課題を抱えた患児に大きな混乱も無く治療経過が推移していった重要な要因として最後に強調しなくてはならないのは患児の情緒的混乱を救った父親の存在である。従来の道徳的価値観に支配された自己イメージが混乱しやすいこの時期に患児の今回の発症の要因の一つとも考えられる嫌いな女友達から万引きを誘われた際に、父親の存在（刑事で、少年課に属し非行問題を担当している）を思い浮かべることでその誘惑から抜け出すことが出来たと述べているのである。即ち、患児の生き方に父親の存在が現実生活の中で大きな影響力を持ったのである。牛島（1980)8）の指摘する前エディプス的父親の登場をうかがわせる現象である。こうした前エディプス的父親の登場は前思春期の自己イメージの破壊と再創造がなされていく発達段階には極めて重要なものとして牛島は力説しているが、本症例でも心身の動揺が大きなこの時期の自己愛の高まりの中で、こうした父親の理想化が自己イメージの創造の中で極めて重要な役割を果たしていたのである。

以上のような情緒発達過程を経て初めて、患児は中学生活での同性の友達への接近が可能になってきているということを本症例は教えてくれている。前思春期の発達課題の中に同性の友達との仲間体験が重要なものとみなされているが、そこに至るまでには本症例で示されたような情緒発達の段階を経ていかなければならなかったことはこの世代の精神発達の援助を考える際にある示唆を与えているように思われる。

おわりに

筆者らは第二次性徴の開始と初潮発来直前に収集癖が出現し、あるアイドル歌手の自殺を契機に抑うつ状態を呈した１１歳の女児の治療を経験した。本症例は短期間の支持的精神療法で治療終結を迎えたが、抑うつからの回復過程を前思春期の情緒発達という視点から検討し報告した。

文献

１）朝日新聞：社説「こどもの死によせて」．１９８６年４月２８日付朝刊.
２）Blos,P.： On Adolescence. Free Press, New York,1962.(野沢栄司訳：青年期の精神医学．誠信書房，東京，1971.）
３）笠原　嘉：今日の青年期精神病理像.（笠原　嘉・清水将之・伊藤克彦編：青年の精神病理１．弘文堂，東京,1976.）
４）警察庁：自殺白書－昭和６０年－．１９８６．
５）小林隆児・牛島定信：前思春期発達をめぐる母親の葛藤－摂食障害の治療を通して－．家族療法研究．6;11-18,1989.
６）皆川邦直：青春期・青年期の精神分析的発達論－ピーター・ブロスの研究をめぐって－.（小此木啓吾編：青年の精神病理２．弘文堂，東京,1980.）
７）村瀬孝雄：思春期の諸相.（岩波講座　精神の科学　６　ライフサイクル，岩波書店，東京，1983.）
８）牛島定信：対象関係からみた最近の青年の精神病理.（小此木啓吾編：青年の精神病理２．弘文堂，東京，1980.
９）牛島定信：過渡対象をめぐって．精神分析研究，26；1,1982.
10）Ushijima,S. and Kobayashi,R. : The Perimenarche Syndrome (a proposal). Jpn J Psychiatr Neurol ,42;209-216,1988.